

宮崎科学技術館における過去16年間の入館者分析

宮崎科学技術館
総務課 主任主事 木月 由子

宮崎科学技術館
総務課 主事 辻 壮剛

研究成果の概要：入館者数データをグラフにし、説明を加えた資料を作ることによって科学技術館の歴史を明確にすることが出来た。団体入館者とプラネタリウム観覧者のグラフを付け加えることで、多方面から入館者の分析をすることが出来た。

1. 研究の背景

入館者のデータは日々の日計表の蓄積であり、現存しているデータは平成9年度から16年間分である。

この積み上げられた記録は科学技術館の財産であると考え、数値を表やグラフにし、推移を明確にすることで事業の組み立てなど様々な取り組みを行ううえでの一つの指針となるものが出来るのではないかと考えた。

2. 研究目的

宮崎科学技術館における平成9年～平成24年度までの過去16年間の入館者の推移をグラフ化する。また、その分析をする。

3. 研究の方法

- (1) 平成9～24年度までの入館者数データ(日計表・月計表・年間表・団体表)を利用し、16年間の入館者推移のグラフを作る。
- (2) 推移のグラフから疑問に思ったことを調査し、推移の裏付けを図る。

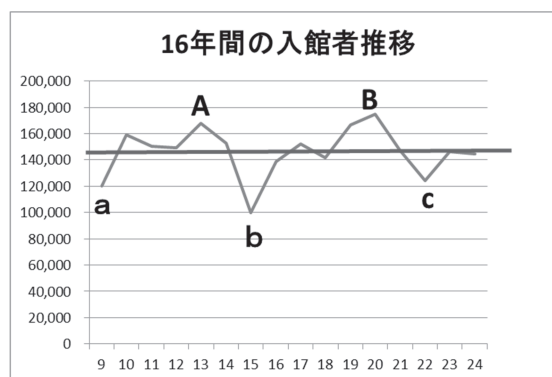
4. 研究成果

- (1) 平成9年度から平成24年度の総入館者推移のグラフを作成した(グラフ1)。
16年間の入館者は累計2,234,419人であり、1

年あたり平均して146,026人入館している。

グラフ1の太線は平均であり、過去2年間(23年度、24年度)においてはほぼ平均値で推移しているが、22年度以前は年度によって、ばらつきがあることが分かる。

グラフ1

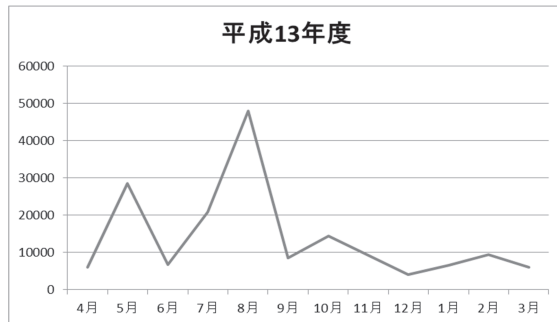


次に推移の分析を行った。グラフ1のa～cは、平均を大きく下回った箇所である。

- a. 9年度 リニューアル工事のため閉館 (9/1～12/24)
- b. 15年度 リニューアル工事のため閉館 (12/1～翌年度4/30)
- c. 22年度 口蹄疫のため閉館 (6/12～7/26)

グラフ1のA、Bは平均を大きく上回った箇所である。

A. 13年度 特に人数増加が目立ったのは、5月と8月である。



グラフ 2

5月の主な行事はこどもの日の全館無料開放だが、この年を含めた平成12年度～15年度は、こどもの日をつなげた3日間を無料開放としており、13年度は3日間で14,815人となっている。(最近の過去5年間におけるこどもの日は約6,500人～8,000人程度を推移) また、8月中の無料開放日を10日間設けている(表1)。

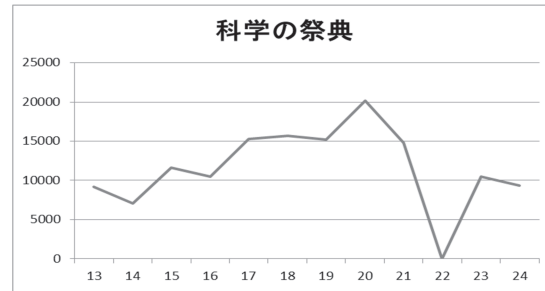
マルチメディアフェア	3日間	10,426人
こども電波教室	3日間	14,096人
科学の祭典	4日間	9,170人
計	10日間	33,692人

表 1 13年度8月の無料開放行事

B. 20年度の入館者(グラフ3)は、174,789人となり、16年間の中で最高の入場者数を記録した。人数増加が目立ったのは8月、11月であるが、8月に行われた科学の祭典(グラフ4)は20,178人であり、前後の年度と比較すると約5,000人増加している。



グラフ 3



グラフ 4

科学の祭典について

※19年度までは「ロボット競技大会」を含めた4日間の日程で行っていた(20年度からは3日間で開催)。

※22年度は口蹄疫のため開催中止。

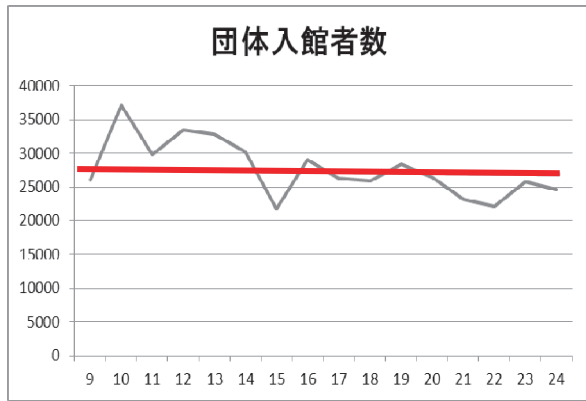
また、11月については新しく「みやざき総合産業祭」をしている。このイベントは、当時中央公民館前広場で行われていた「みやざきテクノフェア」(現在のガス展と類似した行事)とのタイアップであり、宮崎科学技術館では入館料無料開放し、パネル展やセミナーを2日間の日程で8,849人の入館者があった。

16年間において入館者が目立って増えていた13年度、20年度に注目することにより、入館者増の要因は無料イベントの集客に大きく影響されていることが分かった。

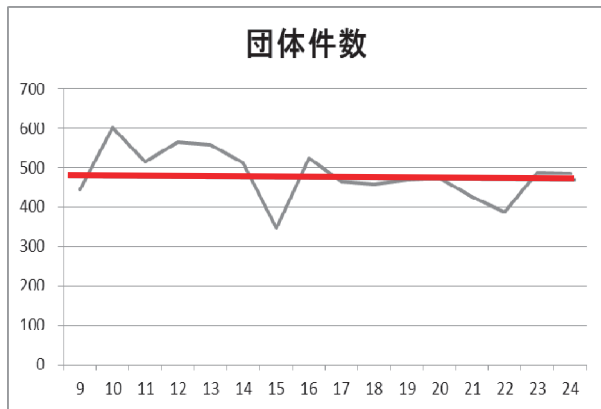
(2) 次に団体利用の推移についてのグラフを作成した。総入館者に占める団体利用の割合は、年度によりややばらつきがあるが、平均して19%程度で推移している。団体入館者数のグラフ(グラフ5)で見ると徐々に右肩下がりに人数が減少していることがわかる。

ただし、団体件数のグラフ(グラフ6)で見ると、やや減少気味ではあるが、近年も平均値並みであることがわかる。このことから、

件数ではなく、団体を組織する人数が減少していることが考えられる。

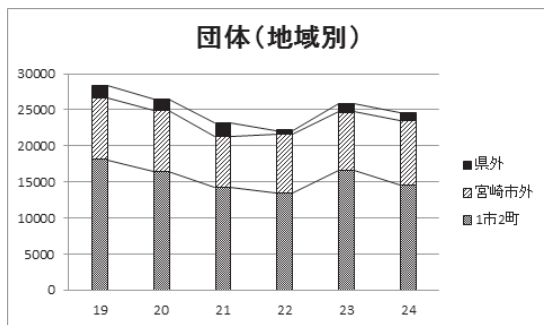


グラフ 5

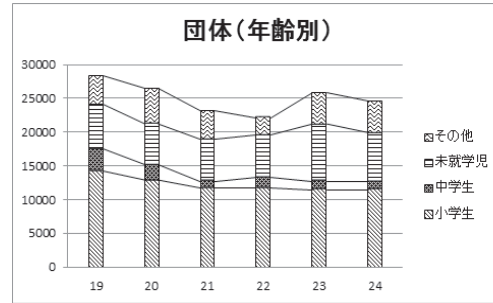


グラフ 6

また、地域別では、1市2町の団体が一番多く、平均して全体の61%を占め、続いて県内の利用が27%を占めている（グラフ7）。また年齢別では小学生の利用が49%、未就学児が27%となっている（グラフ8）。



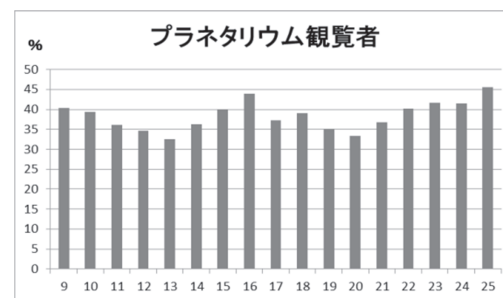
グラフ 7



グラフ 8

団体の推移をグラフにしてみると、1市2町の小学校、幼稚園、保育園の利用が多いことが良く分かった。また、反対に中学校の利用が少ないことも分かる。科学技術館条例での減免対象は、1市2町の幼・保育園、小学校の他、中学校も対象であるので、そこをアピールして中学生にもっと利用してもらいたいと思う。

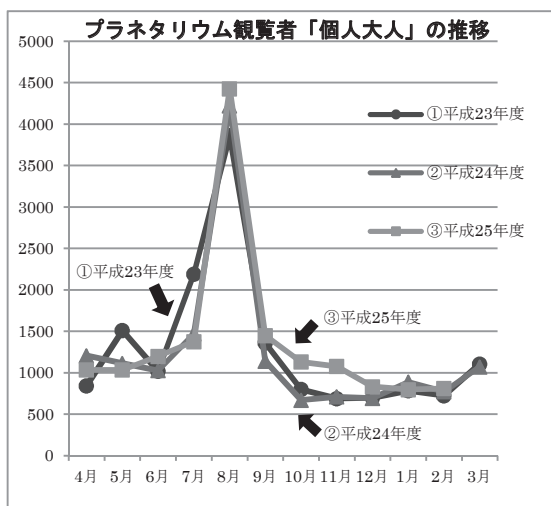
(3) 次に、プラネタリウム観覧者についてのグラフを作成した（グラフ9）。ここではプラネタリウム番組が観覧者の増減に与える影響について調べたので、あえて25年度も入れてグラフを作った。グラフでは、平成9年度～25年度1月までの総入館者に対するのプラネタリウム観覧者が占める割合の推移を示している。総入館者に占めるプラネタリウム観覧者の割合は平均して38%程度で推移しているが、25年度は46%を占めている。



グラフ 9

25年度にプラネタリウム観覧者が増えた理由として、プラネタリウム番組の影響が考えられる。番組「コブクロ～流れ星に願いを～」は平成25年10月から投影を始めたが、その頃から若い層のカップルや友達グループの来館者を良く見るようになった。

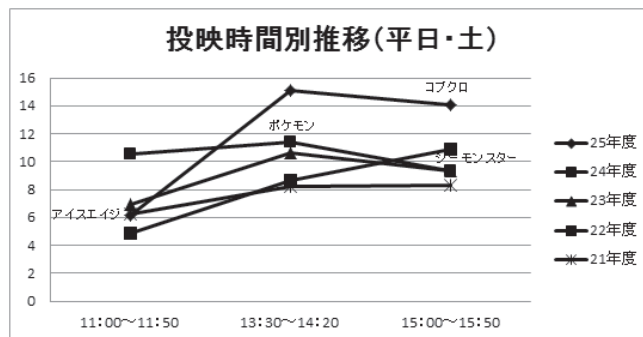
個人大人プラネタリウム観覧者の、平成23～25年の3年間の推移（グラフ10）では、投影を開始した10月、11月頃に増加しているのが分かる。



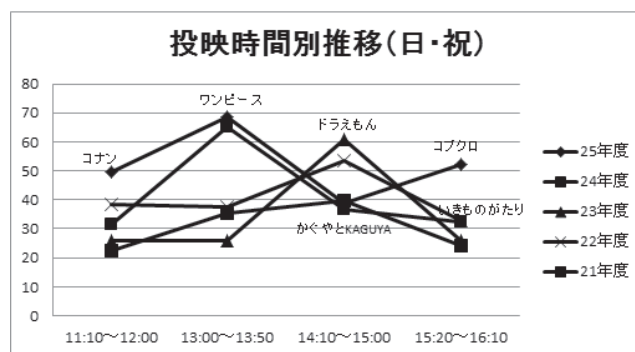
グラフ10

また、同番組の投影を開始した10月～1月末の投影時間別プラネタリウム観覧者数の年度比較（グラフ11、12）を行った。

グラフ11では平日3回投影について、グラフ12では、日・祝日4回投影について示してある。また、人数は投影時間ごとの平均をとったものである。グラフから平日、日・祝ともにコブクロ投影の回が伸びていることが分かる。また、平日ではラインの交差が少ない割に、日・祝ではラインの交差が目立っていると感じた。このことから、観覧者が「放映時刻」ではなく、「見たい番組」で入りたい回を選んでいくということが考えられる。



グラフ11



グラフ12

プラネタリウム番組による観覧者数の増減をグラフ化することにより、どの番組が観覧者にとって魅力的であったかを分かり易く示すことができた。

(4) おわりに

近年では展示物やプラネタリウム機器の老朽化が進んでいる当館であるが、ゴールデンウィークや夏休みに多くの方が来てくれるのを見ると、宮崎科学技術館はやはり、人々にとって魅力的な施設なのだと思うことが出来る。何を魅力に感じて来館しているのか、もっと過去の事業などを掘り下げて研究するとまた新たな発見の可能性が大いにありと感じた。今後も多方面から探究心を持って研究を継続したいと思う。